りな本

次第 きのふやきのふも志のふ山ゞく ハル

下 ズ通語を見世

詞 是ハ諸国一見乃僧にて候我いまだ東国を

ミハん程まゞ暁に思ひ立陸奥の

果までも脩行せばやと思ひ候

次第上 以行くまで哉さゝ路とめしこ行

雲霧く旅衣しのゝて夕暮秋

定めなき旅寝の夢もおぼつかな
うきになり陸奥路ふみ分け里よりも
ほどにならくけふの細布
織りなして衣みやゐくらん
隠れんせ陸奥乃信夫もぢずりわ
旅寝に乱れ初めし我ゆゑ藤に
住吉北斎小鳴子塩竈生家乃浦つ

物思ひをはさせぬ衣手の下
露おきもさびしさぞ秋哉
明しても暮の袖もしほなき世
浮橋やそもいかにか兼ね君見し
あまりは我待つ身にあさましや
思はぬ人を思ひ来の筆り見り
もてなり覚て見や恋慕ひ

なる滝はいくはちしれと多
急ぎとぞ方にかしては滝川流て
早き月は早く　実や流るる
ゆくも足なり瀧川こそとく
吉野の山のはるか雲やまた
れのおくり陸奥乃野乃
那かしおふ細布比なる暫き

錦木乃千度百夜を流よくきるき
逢成りはつくしや　那
うなる市人をいま夫婦と
おかしくも女性もあまりひ
とは鳥の羽の鐵とは布と
なくもすでに男はものたるを
うはくしなきとふまりそわらば

本来は何れもくもりなき所を
貪欲我見は何とやら浮世より
なり 上詞 是非細布とかりこなわ
せはき布なれ 三下詞 是ハ錦木とて
色どり飾りし木なればいづれも
いづれも當世の名物なりとて
めでたき人 半詞 実に錦木細布の

既に及べる名物や抑何故の
名物なるは座そ其 ツレ上カヽリ うらゝて哀
信やむかしの錦木細布乃其
うひもなく昔所まてはなゝも
なりを尋ぬよしなふ 三下詞 いや〳〵
う秋も情理までさゝて猶なさき
なう其は何とて志みしめさらい

臈ありしとやいさしからなし
細布流りさらもなき方まて
歌物語所りしや実や女の夕へ無
岩代乃松のことおとらなき
夕ねの影もよしきて濃花里に
山をや悔る無く 平詞 猶々錦木
細布乃謂は物語る 上詞 着まわ

此所乃習ひにて男女の媒には
此錦木を作くりて女の家の門に
立つる験の木なれはうつくしく色
どり飾りて是を錦木といふ
さる程にあふへき男の錦木をは取
り入はあふまじきをは取入ねは
或ハ百夜三年まてもたてしに

よしやげに三年程は数ならぬなる哉
もありし千束迄積まれし山隠す
錦塚とてたゞ是ぞ三年錦木
立置し人乃古墳なり秋の夜
錦木の数千束塚に埋みこめて
是なりし錦塚と申は候
其錦塚を立て故人の物語り

志ば庵しなしつて路まさん
シテ詞 あらうれしくさらば案内申さん
ツレ上カル いざさらば人を教へんとて夫婦乃
者は先に立ち旅人を伴ひつゝ
下同 けふの細布さかくしそ錦塚を
いづくならん野をわけくさの原
をぎはらこゝろしくして人乃通ひ路

明らかに萩や花薄乃露をもて
旅ねとはまし志めの珠に似て
そや衣とめくれあかな夕ふ
嫁を母をなる女万くれ荒来枯
お時雨露分うつて有し愛濃
山の峰のけも物さひ松柱ま嶋
嫁く乃す蘭菊ひり散まゆくは

なほ狐住める塚乃草はもみぢ葉
深て鉢塚ハ世をと云捨て塚乃
うちよりへまた為去帰い塚ま
いやにくわなしの針使乃く
流の滝乃もくもしかまし秋萩物の
峰風のまま流乃下吹よもりつゝ
お備事をやけしぬすせく

後ツレ上

いはんや一樹一河の流を汲も

他生の縁と聞物をまして屋

値遇乃あさはちうめく屋とわ

いろ草の花乃縁しさまし

紫ふ郷よ紫ゝ法との法屋る

後シテ上

慈き縁乃清吊や那二世とうる

たる契りうふもざうしも三年

下

ね我様が此縁末孫あひのさた

ばの値遇乃き縁さるよいそく

海をこ移やさんぞさうおざきに

出な世縁末乃　三年いさぬ

いはし へ流　捨あみ夢まだ宵

三年の値遇まとそ悔るなり拝と

上同

尾花りもとの思ひ草乃ばよわ

孫さ清笛気錦木 織ハ細布於
えく様との恋路乃色よ綾まて
えゆゝ乃契能りしやく あさ方
まや成なんと覚ぬ さゝ恋きり 恋人
かゝも知覚なは錦木も細布も
恋も彼まて松風さそく 人
あー さ寝りゝ乃野中於塚とそ

あわれ 半